

# 変わらぬ姿、『太古』の『太鼓』

みやこきたいせき  
調査：宮古北遺跡 第27次調査

大きさ：長さ27.5cm、胴部径25cm、  
叩き面18cm

出土年：2022年

時代：古墳時代

「太鼓」といえば、樽形の胴体、その両側面は革張りをし、縁は鋳で止めている—そんな形をイメージをする方が多いのではないのでしょうか。では、いつから太鼓はそのような姿かたちをしていたのでしょうか。令和4年4月、田原本町宮古の発掘調査で、私たちがイメージする太鼓とそっくりな埴輪が見つかりました。

この太鼓形埴輪<sup>たいこがたはにわ</sup>は、樽形の胴部両端に円形の小さな粘土を貼り付けて鋳<sup>びょう</sup>を表現しており、革の縁は線を引くことで表現しています。写実的な造形で、現代の太鼓と形状がほぼ同じであることがわかります。また、胴部中央に大きめの<sup>あな</sup>孔が1つ開いていますが、これは製作及び焼成のために開けたものと考えています。

太鼓形埴輪は、大阪府などで3点ほどの発見例がありますが、いずれも破片資料のため全体像は詳しくわかっていませんでした。今回、田原本町で見つかったものは全体像がわかる資料で、この発見は日本で初となります。

現在、私たちが太鼓の音を聴くのは祭りや演奏会といった場でしょうか。古墳時代では、戦闘の合図や儀礼の場などで鳴らされたのではないかと考えられています。たとえどのような場面でも、私たちと同じ音を1500年前の人々も聴いていたかもしれないと思うと心が躍ります。

